

サン・テグジュペリの『戦時の記録』の内容と解説

加 藤 宏 幸

大部で膨大な『戦時の記録 1939 - 1944』¹⁾には、サン・テグジュペリの論説・覚書・手紙だけでなく、彼と関わった数多くの人々の手紙・証言、そして彼に関係する文書が収められている。この書物について、刊行者は次のように述べている。『戦時の記録』は、戦時中に書かれたすべてのものを指すのではない。未刊のものを加えはしたが、サン・テグジュペリの亡命中に出版された書物、および死後に出版された書物を1巻にまとめようと考えたわけではない。われわれは、書物のうちの1編、もっとも短いものである『ある人質への手紙』*Lettre à un otage*だけを再録した。この書物は、ここに集められた資料の間でその執筆時期に位置付けられると、十分に意味を持つことになる。／伝記作家たちの仕事、特にP・シュヴリエ Chevrier やカーチス・ケイト Curtis Cate の仕事を繰り返そうとは考えなかった。さらに、サン・テグジュペリの生涯のこの5年間で再構成するのに大きな働きをした『イカール』*Icare* 誌の仕事も繰り返さなかった。しかしながらわれわれは、これらの出版物を参照すべき書物として提示した。／われわれがここに提示する資料の一つ一つは、戦争に参加し、つづいて無活動状態に留まることを余儀なくされ、ついに戦闘に戻り戦死した一人の人間の《多様な記録》である²⁾

最小限の説明とともに年代順に配列されたこれらの資料から、われわれは苦難に満ちたサン・テグジュペリの晩年の5年6カ月間の真実の姿を知ることができる。

1. 1939年2月 - 8月。「戦争の恥辱……平和の恥辱」³⁾

1938年9月29・30日、ミュンヘンでチェンバレン、ダラディエ、ヒトラー、ムッソリーニの4カ国首脳会議が開かれ、戦争を回避するために、チェコスロバキアのズデーテン地方のドイツへの割譲が決定された（ミュンヘン協定）。

この直後にサン・テグジュペリは、「パリ・ソワール」*Paris-Soir* 紙（1938年11月2日

1) SAINT-EXUPÉRY(Antoine de), *Écrits de guerre 1934-1944, avec la Lettre à un otage et des témoignages et documents*, Paris Gallimard, [© 1982], 649 p.

2) *Ibid.*, p. 15.

3) *Ibid.*, pp. 21 - 26.

号)で次のように述べている。「われわれは平和を救うことを選んだ。しかし、平和を救うことによって、友人たちの手足を切断してしまった。おそらく、われわれの多くは、友情の義務を果たすために命を危険にさらす覚悟をしていたはずだ。この人たちは一種の恥辱を味わっている。しかし、平和を犠牲にしたとしても、彼らは同じ恥辱を味わっているだろう。そのときには、人間を犠牲にしたことになるからだ。つまりそれは、ヨーロッパの図書館や大聖堂や研究所の取り返しのつかない崩壊を受け入れることになるからだ。伝統を滅ぼすことを受け入れたことになるからであり、世界を灰にすることを受け入れたことになるからだ。だから、われわれの考えは揺れたのである。平和が脅かされているように思うとき、戦争の恥辱を感じる。戦争が免れられたと思うとき、平和の恥辱を感じる」⁴⁾

サン・テグジュペリは、戦争を回避するために、ヒトラーの脅迫に屈服し、チェコスロバキアのズデーテン地方の割譲をフランスが認めたことは止むを得ないと思いながらも、チェコスロバキアに対する友情を裏切ったことは恥ずべきことであると思う。

1939年2月、サン・テグジュペリは『人間の土地』*Terre des hommes* を発表する。

2. 1939年7月—8月。「リンドバーグ夫妻との出会い」⁵⁾

アン・モロー・リンドバーグ Anne Morrow Lindbergh のフランス語版『風立ちぬ』*Le Vent se lève* (原題『風よ、聞け』*Listen, the Wind*) の翻訳者アンリー・デルゴーフ Henri Delgove は、1939年7月、この作品に対して序文を書いてくれるようにサン・テグジュペリに依頼した。

『風立ちぬ』のための序文—「彼女は、専門的考察や具体的事実の描写を通して、人間の条件の問題そのものをなんと見事に感じさせてくれることか！飛行機について書いているのではなく、飛行機を通して書いているのだ」⁶⁾

アン・モロー・リンドバーグの日記(1939年8月4日)—「私は彼が私の作品に抱いている関心や、それについて行った分析—非常に美しい分析—にとらえられただけではなく、彼が私の中に見ることができたものにとらえられてしまう」⁷⁾

1939年8月、ニューヨークに来たサン・テグジュペリは、リンドバーグ夫妻に自宅に招かれ、数日滞在する。彼は夫妻と、文学、絵画、政治、現代生活における機械の役割などについて親しく語り合う。彼らの友情は、サン・テグジュペリの死まで続くことになる。

4) *Ibid.*, p. 21.

5) *Ibid.*, pp. 27 - 49.

6) *Ibid.*, p. 30.

7) *Ibid.*, p. 32.

3. 1939年8月－12月。「観光客としてでなく戦闘員として」⁸⁾

1939年8月27日、ヒトラーはポーランドに侵入する。9月3日、イギリスとフランスはドイツに宣戦布告する。ただちにサン・デグジュペリは動員される。トゥールーズ・モントードラン Toulouse-Montaudran に配属され、教官として航空技術について講義する。戦闘員として戦争に参加しなければ、いろいろな出来事について発言する権利がないと考えている彼は、この仕事に満足できない。

X……への手紙（[トゥールーズ、1939年10月26日]）—「戦いに参加できなければ、精神的にすっかり参ってしまう。いろいろな出来事について言いたいことがたくさんある。観光客としてでなく戦闘員としてでなければ、それらを語ることはできない。それが、私が語ることのできる唯一のチャンスだ。事態が悪化してきているのに、ここでは私を、航空技術のみならず重爆撃機の操縦の教官にしようとしている。だから息が詰まり、不幸であり、沈黙することしかできない（……）。戦争は好きではないが、後方に留まって、危険の分け前を取らずにいることは私にはできない（……）。戦いに参加しなければならない」⁹⁾

戦闘機大隊に加わりたいという願いはかなえられなかったが、サン・デグジュペリは、1939年12月、オルコント Orconte（エヌヌ Aisne 県）を基地とする2 / 33 偵察飛行大隊に配属される。そこで彼は、仲間たちと一体になろうと努力する。

X……への手紙（[オルコント、12月中旬]）—「泥。雨。農場はリウマチにかかっている。空虚な晩。懐疑の憂鬱。1万メートルの不安。そして恐怖。—当然だ。人間たちに要求されるすべてのこと。そしてそれは、人間たちと共に人間であるために必要なことだ。また、私の仲間たちと一体となるために必要なことだ。彼らと別れてしまえば、私は何の価値もないからだ。私は非常に傍観者たちを軽蔑している」¹⁰⁾

4. 1939年12月。「坂道のモラル」¹¹⁾

『坂道のモラル』は草稿（個人所蔵）であり、そのタイトルは作家が付したのではなく、このテキストの1行目から取られたものである。筆跡は走り書きであり、その判読はきわめて困難である」¹²⁾

サン・デグジュペリの言う「坂道」の意味するところは明確ではないが、次の一節がその意味を理解する参考になるであろう。「われわれは、まさに内面の帝国の境界で行われている戦争に勝つために戦っているのである。／しかしその場合には、それに勝たなければな

8) *Ibid.*, pp. 50 - 72.9) *Ibid.*, pp. 54 - 55.10) *Ibid.*, p. 57.11) *Ibid.*, pp. 73 - 80.12) *Ibid.*, p. 547.

らない！それに勝つためには、坂道が必要である。もしわれわれが力をもとんとすれば、われわれが直さなければならない一種の内的悪徳が、より一層強烈に私のところに現れる。石は行くことができるところに行く。石の重みは、同じ方向性を持つ分子の重みで作られている。石の重みは無限の抵抗力を持っている。もし山が振動し、山が崩壊するならば、石はその機会を決して逸することはない。石は沈むことができる度に、確実に沈む。石を駆り立てる力は限りなく注意深い。その力はおそらく不条理で、理論的ではないが、注意深く、容赦なく自分の道を作り出す」¹³⁾

5. 1940年1月。ラン Laon: 「半分の贅沢」¹⁴⁾

ドイツ軍がベルギーに侵入したため、1月16日、2/33飛行大隊はオルコントからランに移動する。オルコントでは彼は農家に住んでいて快適であったが、ランでは共同生活をしなければならない。彼は孤独になれない共同生活に耐えきれない。

X……への手紙（[1940年1月27日]）—「新しい生活にはすっかりうんざりしている。集中暖房、鏡の付いた洋服だんす、半分の贅沢、中産階級的生活。—しかし今になって初めて—私がどんなにオルコントを愛していたかが分かった。農場生活、凍てついた部屋、雪が私を私自身のすぐ近くに近づけてくれた。／また、私は混乱している。もう自分を統一できない。あちらでは希望が続いていた。ゆっくりと……ゆっくりと体が暖まりだしていた。何の価値もないこの体を一体どうしたらよいのだろうか」¹⁵⁾

6. 1940年2月—4月。ラン: 「人工孵卵器の中で」¹⁶⁾

サン・デグジュペリは一度も偵察飛行を行っていない。早く任務を遂行したいと思う。

レオン・ウェルト Léon Werth への手紙（ラン，[1940年2月]）—「あなたもご存じのように、近づいているのにできずにいる飛行、それに私を誘うのは戦争ではありません。しかし、出発と帰還の間のあの完全な無心状態、あの羊飼いの視点、私には自分の殻を破らざるをえないようにしてくれる何かが必要なのです。ここでは、孵卵器の中にいるような感じがします。半分の贅沢についてはよく分かりません。それで、2/33大隊を離れて、職務を続けている1/52大隊に配属されるように努めています」¹⁷⁾

3月29日、ブロック174型機に搭乗して、最初の偵察飛行を成功させる。

13) *Ibid.*, pp. 73 – 74.

14) *Ibid.*, pp. 83 – 84.

15) *Ibid.*, p. 90.

16) *Ibid.*, pp. 95 – 105.

17) *Ibid.*, p. 97.

7. 1940年5月。アラス偵察飛行¹⁸⁾

ドイツ軍の大攻撃を受けて、2 / 33 飛行大隊はナンジス Nangis, ル・ブルジェ Le Bourget, フォンテヌブロー Fontainebleau, オルリー Orly へと退却する。5月23日, サン・テグジュペリはブロック 174 型機に乗り, オルリーから出発し, 高度 300 メートルでアラス Arras を偵察飛行し, ドイツ軍の戦車が町から 5 キロメートルのところまで来ていると報告する。

8. 1940年春。「アメリカ人へ」¹⁹⁾

サン・デグジュペリは, アメリカも戦いに加わるべきであると, アメリカ人を説得しようと試みる。彼はこの戦いが精神的遺産を防衛する戦いであることを力説する。

アメリカ人へ (1940年か 1941年?) — 「われわれは, 人間のために, 人間が盲目の集団によって押しつぶされないようにするために, たとえ理解されなくとも, 画家が絵を描くことができるようにするために戦っている。最初は正統的に思えなくとも, 学者が計算することができるようにするために。われわれは, 世界のあらゆる父親のために, 彼らのすべての息子たちのために戦っている。家族の食卓が確実な愛情で浸されるようにするために。息子たちが彼らの党の伍長に彼らの父親を売らないようにするために。友人が裏切らないようにするために。弱い者が法によって, 掟によって, 普遍的慣習によって保護され, 彼が衣服を防衛することができなくとも, それを保持することができるようにするために。 / しかし, そのためには普遍的慣習が必要である。すべての人間が同時にこの善を防衛することが必要である。各人が同時に自分の帝国, 自分の国家, 自分の精神的祖国の一員となり, 各人を集団から防衛することが必要である」²⁰⁾

9. 1940年6月。「書くこと, だが自分の肉体で」²¹⁾

サン・テグジュペリはいつも肉体で書く。

アン・モロー・リンドバーグの日記 (1940年6月7日) — 「今日, 町へ行く前に, 『トリビューン』 *Tribune* 紙のドロシー・ソンプソン Dorothy Thompson の時評欄が目にとまる。彼女はサン・テグジュペリと交わした対話を引用している。[……] / 『でも, あなたはものを書いておられる……。あなたは出来事や未来を見通すことができます。フランスはあなたを必要とするでしょう。ヨーロッパはあなたを必要とするでしょう』と私は言っ

18) *Ibid.*, pp. 106 – 109.

19) *Ibid.*, pp. 110 – 116.

20) *Ibid.*, pp. 115 – 116.

21) *Ibid.*, pp. 117 – 122.

た。『あなたは完全に間違っております』と彼は答えた。『現在においては、いかなる人も人間である自分の仲間の苦しみを全面的に共有しなければ、ただの一言も書く権利がありません。自分自身の生命を賭して抵抗しなければ、私は書くことはできないでしょう。そして、この戦争にとって真実であることは、あらゆることにおいても真実であり続けるにちがいありません。肉体 Chair となる御言葉 Verbe というキリスト教の考えに奉仕しなければなりません。人は書かなければなりません、自分の肉体でそうしなければなりません』²²⁾

「肉体で書く」とはどのような意味であろうか。『書く前に飛ぶこと、そして危険を冒したことだけを書くこと』と、サン・テグジュペリは、『人間の土地』の成功後、カサブランカでアンリー・コント Henri Comte 博士に語った²³⁾。行動する前に書くのではなく、行動した後でその体験を忠実に記述する。そうすることによって、言葉は肉体となり、行動と言葉が一体となる。これこそが、「肉体で書く」の真の意味である。

1940年6月17日、ペタン Pétain 元帥が新政府を樹立する。元帥は休戦を求め、22日にそれが認められる。2 / 33 飛行大隊は南へ南へ撤退することを余儀なくされ、ついにはアルジェ Alger まで撤退する。

10. 1940年7月－11月。「友情、心の鍛練」²⁴⁾

サン・テグジュペリは8月の初めに動員解除になり、船でフランスに戻り、アゲーの家族のもとに身を落ち着ける。新体制は、ドイツ当局と共同して、ユダヤ人に対していくつかの措置を講じる。10月3日、「ユダヤ人法」が公布される。このような時期に、サン・テグジュペリは、ユダヤ人である彼の親友レオン・ウェルトに会いにゆく。

レオン・ウェルトの日記(1940年10月15日)－「サン・テグジュペリが私と一緒に2日を過ごした。友情は《心の鍛練であり、他の成果はもたらさない》。友情が文学に靈感を与えたことはほとんどない。数世紀の書物の中におけるよりも、このモンテーニュ Montaigne の言葉の中にこそより多くの友情がある」²⁵⁾。サン・テグジュペリは、この出会いの印象を『ある人質の手紙』に記すであろう。

リスボン経由でアメリカへ行くことを考えていたサン・テグジュペリは、ビザを取得するためにヴィシーに行く。ヴィシー政府は著名なこのパイロットを雇い、青少年政策を推進しようとしたが、彼はそれに応じなかった。

22) *Ibid.*, pp. 117 – 118.

23) *Ibid.*, p. 118.

24) *Ibid.*, pp. 123 – 131.

25) *Ibid.*, p. 124.

11. 1940年11月。「復讐のための別れ」²⁶⁾

サン・テグジュペリはマルセイユから乗船し、11月の初めにアルジェに着く。彼はそこで、ルポルタージュを書くために来ていたシャンブ Chambe 将軍と出会う。将軍に同行して北アフリカのいくつかの基地を飛行機で回り、マラケシュ Marrakech で将軍と別れる。

シャンブ将軍の証言—「帰ってきて、私はマラケシュのママニア・ホテルでサン・テックスと別れた。われわれは全く同じことを考えていた。彼はタンジール Tanger に行こうとしていた。われわれは抱擁し合った。／『復讐のためにわかれるのだ！それは間違いなくアルジェから始まるであろう。ではまたアルジェで！』」²⁷⁾

12. 1940年12月。「ギヨメ Guillaumet が死んだ」²⁸⁾

11月下旬、タンジールから乗船したサン・テグジュペリはリスボンに到着する。11月27日、友人ギヨメの死を知る。彼の飛行機が地中海上空で撃墜されたのである。

X……への手紙（エトリル、ポルトガル、[1940年12月1日]）—「ギヨメが死んだ。今晚私にはもう友がいなくなったように思える。／私は彼を哀れには思わない。私は死者を哀れに思ったことは一度もない。しかし、彼の死、それを学び取るには非常に長い時間を要するであろう—私はすでに、この恐ろしい仕事の重みを感じている。それは何か月も何か月も続くであろう。私はしばしば彼を必要とすることになるだろう」²⁹⁾

1940年12月初旬、サン・テグジュペリはリスボンを離れ、アメリカ合衆国に向かい、12月31日、ニューヨークに着く。

13. 1940年1月。「アメリカ合衆国を訪問して」³⁰⁾

サン・テグジュペリはフランスの敗北の原因を理解していた。

「ニューヨーク・タイムズ」*The New York Times* 1月1日の見出し—「フランスの崩壊の責任は軍部指導者にある。／作家であり飛行家であるサン・テグジュペリは、彼らが近代戦を理解できなかった、と語る」³¹⁾

ラウル・ド・ルーシー・ド・サル Raoul de Roussy de Sales の日記（1941年1月4日）—「戦争についてサン・テックスは言う。『われわれが戦わなかったのは、全軍がそれが何の役にも立たないことを本能的に理解していたからである』。／彼はまた、士気を掻き

26) *Ibid.*, pp. 132 - 136.

27) *Ibid.*, pp. 134 - 135.

28) *Ibid.*, pp. 137 - 144.

29) *Ibid.*, p. 137.

30) *Ibid.*, pp. 147 - 162.

31) *Ibid.*, p. 147.

立てることができたかもしれないが、その唯一の結果は、2百万人の死すなわちフランス人種の絶滅となったかもしれない、と言う。すべてのフランス人と同様に、彼もまたドイツ軍の兵器の抗しがたい優越性というテーゼをはっきりと受け入れている」³²⁾

サン・テグジュペリは、ドイツと戦わず、ドイツと休戦協定を結んだのは止むを得なかったと考える。ヴィシーに設置された著名人の議会である国民会議に、事前に何らの相談もなく、任命されたことを知ったとき、サン・テグジュペリは新聞とラジオを通して声明を発表し、それを拒否した。彼の中傷者たちは、その否認は彼によって書かれたものでないと主張したので、彼は、「新聞に発表され、ラジオで放送されたテキストは、自分自身の手で書かれたものである」³³⁾（「中傷者への回答」）と断言した。

14. 1941年3月－4月。「ロンドンに行くべきか」³⁴⁾

当時アメリカに住むフランス人はどのような態度をとっていたのか。

レオン・ヴァンセリウス Léon Wencélius 教授（当時スワスモア・カレッジの哲学教授）の思い出—「一方ではドゴール將軍とドゴール派がフランス人を集合させようと努め、他方ではヴィシー政府の代表者たちが元帥の態度を理解させようと試みていた時代であった。この新種の磁石の両極の間に、あらゆる種類の真面目な熱狂者たち、日和見主義者たち、とりわけ、自分たちと同じ考え方をしないすべての人たちに対して呪いの言葉を浴びせる不寛容な予言者がいた。アメリカのフランス人は、宗教戦争の時代に戻ってしまっていた。人々は、公平な歴史が1世紀後にしか決着をつけることができない問題、1940年の休戦の正当性、イギリスによる大陸封鎖の有効性、ヴィシーにおけるリーイ Leahy 提督（当時、アメリカの駐仏大使）の存在の時宜性などについて熱心に議論していた」³⁵⁾

このような状況の中で、サン・テグジュペリはどうしたか。

同教授の思い出—「サン・テグジュペリは何をしようとしていたのだろうか。彼はニューヨークに到着したとき、ロンドンに行くことを夢見ていた。彼はフランス人の間における分裂を見て、アメリカにおいて過激な集団に変質してしまった諸集団を支持することを止めた。実際、イギリスによる封鎖がゆるめられるのを見るよりもむしろ、フランスの子供たちの死を喜んで受け入れ、フランスで起きているすべてのことを徹底的に悪く言う人たち、勝利が近づくにつれて、銃殺や粛正のことしか考えない人たち、そのような人たちとどうして連帯することができようか。他人に世界のすべての罪の責任を負わせ、自分の潔

32) *Ibid.*, p. 151.

33) *Ibid.*, p. 161.

34) *Ibid.*, pp. 163 - 174.

35) *Ibid.*, p. 168.

白さを声高に叫び続けるこの新種のパリサイ人とどうして一体となることができようか。／『私はフランスの一員であり、私の同胞とたもとを分かつことは決してないだろう』と、当時サン・テグジュペリは『戦闘パイロット』*Pilote de guerre* の中で叫んだ。分裂に加わる代わりに、飛行家は団結を探し求めていたのであり、彼の本性の寛大さによって、彼に状況の真相を理解させてくれるより高い観点に到達してしまっていた³⁶⁾

同教授の思い出―「より高い観点に身を置くことは容易なことではない。風と潮に対抗してそれを維持し続けることはさらにずっと困難である。1941年と1942年の間、サン・テックスは身体的にも精神的にも病んでいた。胆嚢と肝臓が彼を休息させてくれなかったし、そしてわれわれは何度、サン・テックスや彼と同じ考え方をする人たちをファシストとかナチというようなもっとも卑劣な名で呼ぶ同胞に出会って、われわれの共通の苦しみを確認し合ったことだろう³⁷⁾

サン・テグジュペリはどの党派にも属さず、アメリカに住むフランス人の団結を求めている。

1941年の春の終わり、ハリウッドのジャン・ルノワール Jean Renoir のもとに行く。そこに滞在中、2度外科手術を受ける。

15. 1941年春-夏。「『城砦』は死後に出版されるだろう³⁸⁾

ルイス・ガランティエール Lewis Galantière の思い出―「ニューヨークに戻る前の休息の時期に、サン・テグジュペリは、1937年9月以来メモを書き込んできた数冊の手帳を読み返した。それを彼は、微笑しながら自分の《死後の作品》と呼んでいた³⁹⁾

16. 1941年11月。「神経と心の平和を取り戻すこと⁴⁰⁾

サン・テグジュペリの手術後の回復は順調ではない。

ルイス・ガランティエールへの手紙（[1941年11月]）―「だから、私の本の完成が遅れていることを許してくれ。私はあなた以上にそれに絶望している。やっと本当の回復期に入ったと思っているので、それだけが働くことを可能にしてくれる神経と心の平和を取り戻せると希望している⁴¹⁾

1941年11月、サン・テグジュペリは、ニューヨークで『戦闘パイロット』の執筆に精力

36) *Ibid.*, pp. 168 - 169.

37) *Ibid.*, p. 169.

38) *Ibid.*, pp. 175 - 191.

39) *Ibid.*, p. 188.

40) *Ibid.*, pp. 192 - 204.

41) *Ibid.*, p. 194.

的に取り組む。

17. 1941年12月。「今、アメリカが参戦した」⁴²⁾

サン・テグジュペリはドゴール派に加わる意志は全くない。

ルイス・ガランティエールの思い出—「彼は、敗北と屈辱のこの時期に、いかなるフランス人も他のフランス人と戦う権利はないと確信していたし、声高に叫んでもいた。彼によれば、国民的団結が他のいかなる要求にも勝るべきものであった。サン・テグジュペリは是非はともかく、ドゴール將軍がフランス人に自分の指揮のもとに参加するように呼びかけていた戦いは、骨肉相食む戦いであると考えていた。この限りにおいて、彼は戦いに参加することを拒否したのである」⁴³⁾

1941年12月7日、日本軍がパール・ハーバー Pearl Harbor のアメリカ軍基地を攻撃した。アメリカが参戦する。

ジャン・ジェラルド Jean Gérard Fleury (新聞記者、イギリス空軍付の戦時特派員) の証言—「ニューヨークに戻ると、私はセントラル・パークに駆け付けた。そこに、ときどき大声を上げて喜んでいたサン・テグジュペリを見つけた—今、アメリカが参戦した。フランスの救済の始まりだ！」⁴⁴⁾

18. 1942年1月。「締め切り日の話とは何か」⁴⁵⁾

1942年1月。サン・テグジュペリは、『戦闘パイロット』の翻訳本『アラスへの飛行』*Flight to Arras* に最後の手を加える。原稿の引き渡しが遅れているため、出版者が彼に抗議する。

ルイス・ガランティエール (サン・テグジュペリの作品の翻訳者) への手紙 ([1942年1月]) —「締め切り日の話とは何か。その絶体的性格は取るに足りないことなのに、どうして永遠に締め切り日のことを気にしなければならないのだ」⁴⁶⁾

19. 1942年2月—3月。「『わが闘争』に対する民主主義の最良の回答」⁴⁷⁾

『戦闘パイロット』の英語版は1942年2月20日にアメリカで出版され、6カ月間ベストセラーとなる。

42) *Ibid.*, pp. 205 – 211.

43) *Ibid.*, p. 206.

44) *Ibid.*, p. 207.

45) *Ibid.*, pp. 215 – 223.

46) *Ibid.*, p. 218.

47) *Ibid.*, pp. 224 – 237.

「プール・ラ・ヴィクトワール」*Pour la Victoire* 紙第9号(1942年3月7日) — 「アメリカの新聞はこぞって、異論の余地のない傑作として、この戦争の最初の偉大な書物の誕生を歓迎した。／『夜間飛行』*Vol de nuit*と『人間の土地』の著者は、『戦闘パイロット』を出版することで、稀なる美と比類ない激しい感情の書物を与えた。『戦闘パイロット』は、敗北と亡命の暗い年月の間に出版されたフランスの書物の中に、誇り高い書物として、刻まれるであろう」⁴⁸⁾

「アトランティック・マンスリー」誌(1942年4月号) — 「戦闘員の信条であり、行動する飛行士の物語であるこの作品とチャーチルの演説は、民主主義が『わが闘争』に対して今日までに見出した最良の回答である」⁴⁹⁾

サン・テグジュペリは賞賛だけを受けたのではない。休戦を正当化し、ヴィシーを擁護している書物であるとか、フランスの敗北を認めた書物であると言って非難する人たちもいた。

20. 1942年5月－9月。「まず生き延びること」⁵⁰⁾

1942年4月末、サン・テグジュペリはカナダに行き、そこで2度講演する。彼は、偵察飛行において自分が見た戦争について述べ、勝利は人々を団結させるが、敗北は人々を分裂させる、と指摘した。

モントリオールのウインザー・ホテルで行われた講演(「ラ・プレス」*La Presse* 紙、1942年4月29日) — 「すべての軍事的敗北は分裂の要因を生む。もっと高く飛び、フランスを見よう。人間的フランス、精神的フランスを。／どちらの場合においても、ただ一つの義務が課せられている—生き延びることだ!／人間的には、飢餓が子供の生命の源泉を、明日の世代をむしばんでいる。わが国は、すでに昨年、栄養失調のために25万人の子供たちを失った……。ナチは、ポーランド民族を絶滅したように、フランスを消そうとしている」⁵¹⁾

サン・テグジュペリはヴィシー政府のビザを所有しているとして告発され、カナダからアメリカへ再入国できなくなり、5日のカナダ滞在予定が5週間にも及ぶことになった。

21. 1942年11月。「まずフランスである」⁵²⁾

サン・テグジュペリは、ラジオで、「まずフランスである」という言葉で始まる訴えを行

52) *Ibid.*, pp. 262 - 270.

53) *Ibid.*, p. 265.

54) *Ibid.*, pp. 271 - 287.

55) *Ibid.*, p. 275.

56) *Ibid.*, p. 286.

う。この訴えは、1942年11月29日の「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」*New York Times Magazine* に、「あらゆる所にいるフランス人への公開状」*An open letter to Frenchmen everywhere* というタイトルで英訳が発表された。

彼は、アメリカに住むフランス人に対して、和解してフランスに奉仕しようと訴える。

「自由な戦いと闇の中における抑圧とのあいだには共通点はない。兵士の職業と人質の職業の間には共通点はない。あちらにいる人たちだけが真の聖者である。もしわれわれが近いうちに戦いに参加する光栄に浴するとしても、われわれはまだ負債を背負っている。われわれは負債の塊にすぎない。まずここにこそ、基本的な真実がある。／フランス人よ、奉仕するために和解しよう」⁴⁸⁾

22. 1942年12月。「ジローードゴール問題はばかばかしい」⁴⁹⁾

1942年12月12日、「プール・ラ・ヴィクトワール」紙は11月29日付のサン・テグジュペリの訴えに対するジャック・マリタン Jacques Maritain の回答を発表する。

「ときには裁かなければならない」(サン・テグジュペリの公開状について) — 「フランス人よ、ドイツとの戦いにおいて団結しよう。共通の敵と戦う人たちと並んで最後まで忠実に行われる戦争の軍事的要求を、他のいかなる考えのためにもないがしろにしないようにしよう。これこそ直接的義務である。この義務は1939年9月(注: フランスがドイツに宣戦布告した月)以来われわれに課せられている。1940年6月(注: フランスとドイツが休戦協定を締結した月)にもわれわれに課せられた。それは今まで以上にわれわれに課せられ続けている。／このような義務を否認し、このような団結を打ち砕いた人たちがいる。1940年6月17日に戦いを放棄し、イギリスとの同盟を破棄し、フランス国民を休戦の罠に中に投げ込んだ者たちである。サン・テグジュペリはそのことを忘れるべきではなかった」⁵⁰⁾

ジャック・マリタンは、フランスとドイツとの休戦協定は止むを得ない選択であったことを認めるサン・テグジュペリを厳しく批判した。

ドゴール派とジロー派の対立はかなり激しかった。サン・テグジュペリは両派の和解を望んだ。

ジャック・マリタンへの手紙([1942年12月19日]) — 「ジローードゴール問題はばかばかしい。もしドゴール将軍が全フランスを代表するために選ばれるならば、われわれは下心なく彼を支持するであろう」⁵¹⁾

48) *Ibid.*, p. 232.

49) *Ibid.*, p. 233.

50) *Ibid.*, pp. 238 - 261.

51) *Ibid.*, p. 243.

23. 1943年1月－4月。「フランスにおける『戦闘パイロット』」⁵⁷⁾

『戦闘パイロット』は1942年11月27日に印刷が完了し、数日後に販売される。批評はほとんど一致して、この書物を傑作と認めた。

「レ・ヌヴォー・タン」*Les Nouveaux Temps* 紙（1943年1月8日）－「確かにこの作品は偉大で美しく、おそらく1939年の戦争を描いた真の作品である。私は2度読んだし、これを他の人に読ませることが私の願いである。これは、他の戦争を描いた作品とはほとんど比べられない。大部分の人にとってはそれは教訓になるだろうし、他の人にとっては励ましとなるだろう」⁵⁸⁾

同じ1943年1月8日、P・A・クストー-Cousteauの批判が発表され、これが数日後の1月11日、作品の販売停止を引き起こすことになったようである。

「ジュ・スイ・バルトゥー」*Je suis partou* 紙（クストー）－「サン・テグジュペリ氏は、書物の冒頭から、彼の偵察飛行大隊で、もっともすばらしい、もっとも大胆な、もっとも感じのよい男は、彼がすべての男のうちでもっとも愛する男は、イスラエル Israël という名の男であるとわれわれに説明する。われわれに対して再び行おうとしているのは、《大いなる幻影》（注：ジャン・ルノワール監督の映画）の策動である。ヒロイズムの背景の上に、一人のユダヤ人の姿を生き生きと描きだし、そうすることで、この民族全体を引き立てる」⁵⁹⁾

サン・テグジュペリは、親ユダヤ主義者、反ドイツ主義者と見なされ、『戦闘パイロット』は販売禁止となる。しかし、それは密かに読まれ続ける。

1943年6月、『ある人質への手紙』が、ブレンターノ Brentano 社から出版される。

24. 1943年2－4月。ニューヨークからオランへ⁶⁰⁾

ジロー将軍によって派遣されたベトゥアール Béthouart 使節団が、1月初旬からアメリカに滞在していた。サン・テグジュペリはベトゥアール将軍にしばしば会い、北アフリカに戻り戦いに参加したい旨を告げ、そのために助力してくれるように頼む。ついに北アフリカの戦闘部隊に編入される保証を受け取るが、ドゴール派が彼の出発を妨害する。

3月、サン・テグジュペリが北アフリカへの乗船証書を受け取ったとき、『星の王子さま』の英語版 *The Little Prince* とフランス語版 *Le Petit Prince* が出版される。

妻コンスエロ Consuelo への手紙（[1943年4月中旬]）－「ここに留まる理由は十分にあ

57) *Ibid.*, pp. 291 – 236.

58) *Ibid.*, p. 297.

59) *Ibid.*, p. 298.

60) *Ibid.*, pp. 345 – 358.

り、兵役免除の理由は10もあり、すでに一激しく一戦ってきたが、それでもやはり私は出発する。私は出発する(……)。どうしてもそうする必要がある。飢えている人たちから遠く離れていることに耐えられない。私の良心と和解できる手段は一つしかない。それはできるだけ苦しむことだ」⁶¹⁾

1943年4月20日、サン・テグジュペリは、軍の輸送船でニューヨークからオラン Oran へ向かう。

25. 1943年5月。「サン・テグジュペリは卑劣漢だ」⁶²⁾

サン・テグジュペリはルネ・ガヴワール René Gavoille 指揮下の、ラグーア Laghouat に基地を置く2/33飛行大隊に編入される。

北アフリカにおいても、ジロー派とドゴール派の対立は激しかった。

最近ドゴール派に加わったある空軍将校への未投函の手紙(1943?)—「私について、あなたは次のように言った—合衆国でドゴール派に加わらなかったサン・テグジュペリは卑劣漢だ。われわれは彼にそれに対する釈明を要求する。彼は2年間何をしていたのか」⁶³⁾

シルヴィア・ハミルトン Sylvia Hamilton への手紙(日付なし)—「わたしがニューヨークでドゴール派に加わらなかったのは、彼らの憎悪による政策が私にとって真理ではなかったからです……。彼らは私のニューヨークでの生活を非難し、私をののしりました。だから今日私は、骨の髄まで肉体を賭けることによって、私が純粋であることを証明できて非常に嬉しい。人は自分の血でしか署名することはできない」⁶⁴⁾

2/33飛行大隊は、ウジダ Oudjda に基地を置く、エリオット・ルーズヴェルト Elliott Roosevelt 指揮下のアメリカ第3写真偵察大隊に併合される。規則では、P 38 ライトニング機の操縦は30歳以下のパイロットにしか許されなかったが、シャンブ將軍の助力によって、その操縦許可がサン・テグジュペリに与えられる。

26. 1943年6月。「もっとも暗い時代に向かって」⁶⁵⁾

5月30日、ドゴール將軍がアルジェに到着する。6月3日、ジローとドゴールが共同委員長を務める国民開放フランス委員会が設立される。

サン・テグジュペリにとっては、人間の意義の問題が重要である。

X……將軍(シャンブ將軍?)への手紙([ウジダ, 1943年6月])—「実質そのものが脅

61) *Ibid.*, p. 353.

62) *Ibid.*, pp. 359 - 370.

63) *Ibid.*, p. 368.

64) *Ibid.*, p. 369.

65) *Ibid.*, pp. 371 - 387.

かされているのです。しかし、実質が救われたときに、われわれの時代の問題である根本的問題が提起されるでしょう。それは人間の意義の問題です。それに対しては解答は提出されていないし、私はもっとも暗い時代に向かって歩んでいるような気がする』⁶⁶⁾

6月19日、サン・テグジュペリは高空飛行適格と認定される。

27. 1943年7月。「私は肅清の神話を憎む」⁶⁷⁾

サン・テグジュペリは肅清の話聞きたくなかった。

ディオメード・カトルー Diomède Catroux 中尉への未投函の手紙（チュニス、1943年夏）「私はさまざま深い理由で、肅清の神話を憎む。それは私が嘲笑している何某を救うためではない。いずれにしても、彼は死ぬことになるだろう。しかし、一つの階級、一つのカースト、一つの集団を呑み込むことは、確かに悪を呑み込んでしまうが、しかしそれらがその受託者であった、ときどき目に見えない善をも呑み込んでしまう」⁶⁸⁾

28. 1943年8月。アルジェーモロッコーアルジェ⁶⁹⁾

1943年8月1日、第2回目の攻撃から帰還したサン・テグジュペリは、着陸の際に片翼をオリーブの木に引っ掛ける。翌日アメリカ軍はこの事故を口実にして、ライトニング機操縦の年齢制限の規則を適用して、彼の操縦を禁止する。彼の悲しみは大きかった。マックス・ポール・フーシェ Max-Pol Fouchet の思い出「私は、年齢制限のため彼が飛べなくなったことを知ったときの彼の悲しみを覚えている。『私のような年老いた冒険家に一体何ができようか』と彼は私に言った。もの思いに沈みながら、彼は付け加えた。『しかしながら、フランス人に語る権利を獲得しなければならない。その権利が奪われようとしている。行動に加わっていないければ、私は何ものでもない』」⁷⁰⁾

8月19日、サン・テグジュペリはチュニスを去りアルジェに行く。アンファ Anfa のコント Comte 博士宅で1カ月を過ごしアルジェに戻り、ペリシエ Pélissier 宅に身を寄せる。

29. 1943年9月－10月。アルジェ。「もの思いに耽って」⁷¹⁾

サン・テグジュペリは孤独であった。

モラウキー Morawsky 大使（アルジェのフランス臨時政府付ポーランド大使）の思い出

66) *Ibid.*, pp. 380 - 381.

67) *Ibid.*, pp. 388 - 402.

68) *Ibid.*, p. 394.

69) *Ibid.*, pp. 403 - 416.

70) *Ibid.*, p. 406.

71) *Ibid.*, pp. 417 - 421.

—「私は、私のテーブルの近くに、いつももの思いに耽り、顔に悲しい超脱の表情を浮かべたフランス空軍の少佐がいるのに気が付いていた。それは、サン・テグジュペリだった」⁷²⁾

30. 1943年11月－12月。アルジェ。折れた椎骨⁷³⁾

1943年11月5日、サン・テグジュペリはペリシエ博士宅の階段で転び、椎骨を折る。彼にとってもっとも辛いのは、戦闘に参加できずにいることである。

X……への手紙（アルジェ，1943年末，11月中旬？）—「私はとても意気阻喪しています。全力を出して書こうと思っていますが、ここは私にとって非常に不健全な雰囲気です。私は《自分の人生を失いました》。成果を挙げられずに消耗して行くというような気持ちになったことは一度もありません。ひどいことです。ああ！2カ月前にライトニング機に乗って健全に戦争任務を遂行していた時期が懐かしい！あの馬鹿なアメリカ人たちは、私から飛ぶことを奪うことによって何をしたか知らないのです」⁷⁴⁾

31. 1943年12月。アルジェ。「頭の中は暗く、心の中は冷たい」⁷⁵⁾

サン・テグジュペリに対する中傷・侮辱は収まらない。

X……への手紙（[1943年12月]）—「私はこの時代に耐えられない。（……）すべてが悪化した。頭の中は暗く、心の中は冷たい」⁷⁶⁾—「私はもう中傷にも、侮辱にも、この驚くべき失業にも耐えられない。愛の外で生きることはできない。私は愛によってしか、語ることも、行動することも、書くこともしてこなかった」⁷⁷⁾

32. 1944年1月－2月。アルジェ。「ペスト患者」⁷⁸⁾

アメリカ派遣のフランス軍事使節団へのサン・テグジュペリの参加は、ドゴール將軍によって拒否される。

北アフリカでは、サン・テグジュペリの作品の販売は禁止されている。

X……への手紙（[アルジェ，1944年1月10日]）—「ここに合衆国からの書物の大きな積み荷が着いた。私の書物だけが販売されていない。私はペスト患者だ……。それでもかまわない」⁷⁹⁾

72) *Ibid.*, p. 418.

73) *Ibid.*, pp. 422 - 451.

74) *Ibid.*, p. 450.

75) *Ibid.*, pp. 452 - 469.

76) *Ibid.*, p. 452.

77) *Ibid.*, p. 455.

78) *Ibid.*, pp. 473 - 485.

79) *Ibid.*, p. 477.

33. 1944年3月－9月。「私は20歳の心をもっている」⁸⁰⁾

多くの友人を通して地中海方面アメリカ空軍司令官イーカー將軍に働きかけた結果、規則に反するけれども、例外的にサン・テグジュペリの飛行が許可される。

ロベール・アロン Robert Aron の思い出—「ついで、打ち明け話の口調で彼は言った。『若返ったように思わないか……。20歳だ。ほら、項から頭のでっぺんにかけて、髪が1本ずつまた生えてきた……。20歳の心だからだ！』」⁸¹⁾

1944年5月16日、サン・テグジュペリは、サルジニア島のアルゲーロ Alghero に基地を置く2/33飛行大隊に復帰する。

34. 1944年6月－7月。「最後まで同僚たちとともに」⁸²⁾

6月14日、サン・テグジュペリは、フランスのロデス Rodez 地方の上空を飛ぶ。2機のドイツ戦闘機に突然襲われ、やっと逃げることができた。7月29日、アヌシー湖の上空、高度9000メートルで、吸入器の酸素が漏れ、急降下しなければならなかった。そのしばらくあとで、同じ地方を飛行していたとき、左エンジンが故障し、山頂よりも低く降下し、ゆっくり飛行しながら帰還した。多くの人が飛行機に乗らないように説得した。

7月1日、2/33飛行大隊はコルシカ島のボルゴに移動する。

7月24日、シャサン Chassin 大佐は、アルジェに來たサン・テグジュペリに、飛ぶことを止めるように勧めた。彼は答える。「それはできない。最後まで同僚と共に留まる」

35. 1944年7月31日⁸³⁾

7月31日、8時45分、サン・テグジュペリはアヌシー上空に向かって離陸した。13時になっても帰還しなかった。無線の呼び出しにも応答がなく、レーダーが探したが無駄であった。14時30分、飛んでいるという希望はもはやなくなった。

サン・テグジュペリがどこでどのようにして死んだかについては調査が行われてきたが、まだ明らかになっていない。

当時ドイツ軍将校であったヘルマン・コルト Hermann Korth の証言（1949）—彼は自分の個人用手帳に、1944年7月31日の日付で、アヴィニオン副司令部からの報告を書き留めていた。「偵察機1機撃墜、海上にて炎上」

見習士官ロベルト・ハイヒェレ Robert Heichele の証言（1982）—1944年7月31日、彼

80) *Ibid.*, pp. 486 – 503.

81) *Ibid.*, p. 493.

82) *Ibid.*, pp. 504 – 517.

83) *Ibid.*, pp. 519 – 529.

はサン・ラファエルの南方約10キロで、12時5分にライトニング機1機を撃墜した。

当日ビヨ Biot にいた予備役大佐クロード・アラン・ジャジェ Claude-Alain Jaeger 氏の証言—1944年7月31日月曜日のメモ。「11時数機、白い戦闘機雲 3000メートル……。12時1機低空で通過、対空砲火少々……」。この1機はP 38 ライトニング機であった。

ドイツ人指揮官レオポルド・ベーム Leopold Böhm の証言—モンテカルロの方へ向かっている3機が現れるのを見た。2機が1機を攻撃し、海面に撃墜した。

以上の証言のいずれにも反論があり、サン・テグジュペリの死の真相は明らかにされていない。

36. 死後の反応⁸⁴⁾

「プール・ラ・ヴィクトワール」紙(1944年8月19日)—「サン・テックスは、亡命フランス人の間でまさにそうであった。高い、高貴な大聖堂であった。彼がある種の亡命者たち—彼が《帰る家のない放蕩息子たち》と呼んでいた人たち—の憎しみを招いたのは、何も驚くにあたらない。憎しみを秘めたいかにも優しくな理論家たちは、彼に《選択すること》を強く迫った。ニューヨーク5番街の闘士たちは、彼に《フランスへの愛を証明すること》を勧めた。サン・テックスは、ニューヨークの摩天楼の間であって、あまりにも偉大で、あまりにも真実で、あまりにも純粋で、あまりにもフランス的であった。彼はすべての人間に、『戦闘パイロット』のほんとうに素晴らしいページで答えていた／『私は、母親が乳を与えることによって自分の子供を育てるように、血を与えることによって同胞に対する愛を築いた……。愛を築くには、まず犠牲から始めなければならない』⁸⁵⁾

アン・モロー・リンドバークの日記(1944年10月8日)—「とにかく、私の精神は反逆し、推理する。要するに彼はフランスのために死ぬことを望んでいた。最後の犠牲を行おうと望み、それを求めて帰った。彼の有罪性(もっとも苦しんだ人に対する)はその後鎮まった。しかし、私は反抗し、叫ぶ—《全くその必要はなかった!》。彼は、自分は有罪であると感じる必要はなかった」⁸⁶⁾

ロベール・アロン Robert Aron の思い出(1946年)—「アルジェに再び立ち寄った最後の日、彼は自分が死刑を宣告されていることを知っていた。(……)私はある友人から聞いたのであるが、彼はその友人に、もう再び会えないだろうと告げていた。どうして彼は避けられないことを知っていた運命を受け入れたのか。(……)就いていることを名誉に思う戦闘の部署に最後まで留まろうとする兵士の誇り—挑戦と冒険への関心。しかしまた、間

84) *Ibid.*, pp. 530 - 544.

85) *Ibid.*, p. 534.

86) *Ibid.*, p. 537.

違いなく、彼に襲いかかった激しい非難の思い出である……。／私の言葉を吟味し、さらに、人間には自分が行う悪に全面的に責任がない状況もあり得ることを非常によく知ったうえで、私は、首都アルジェはサン・テックスを殺すのに一役買ったと言いたい。彼の銃弾と同じように、彼の心臓を撃ち抜いたのは、フランス人の間における争いであり、敵対関係であり、愚かさである。彼は、その子供たちが愛し合う味を失ってしまった国に対するあまりにも多くを要求する、あまりにも明晰な愛のために死んだのである。彼は、セクト主義と憎悪に対して抗議しながら死んだのである。将来、彼の与えた教訓が完全に失われてしまうことがないように」⁸⁷⁾

サン・テグジュペリに関する膨大な記録を収めた『戦時の記録 1939 - 1944』は、彼が『人間の土地』を発表した1939年2月から、フランス上空へ偵察飛行に出たまま帰還しなかった1944年7月31日までの5年6カ月に亘る期間彼がいかに生き、いかに考えたかを正確にわれわれに伝えてくれる。すべて第二次大戦下で過ごされた彼の晩年は、戦争の影響を強く受け、波乱に富むものであったが、彼の信念と行動は一貫していた。

晩年のサン・テグジュペリは、特にドゴール派から浴びせられた中傷と侮辱に苦しんだ。1940年6月、ペタン元帥が率いるヴィシー政府は、ドイツと休戦協定を締結した。戦闘が継続すればフランス人の犠牲者は数百万人に上り、フランスの国土も文化遺産も破壊されると思ったサン・テグジュペリは、休戦協定は止むを得ないと考えた。このことが、後にドゴール派から糾弾されることになる。彼はアメリカへ行くことを考え、ヴィシー政府からビザの発給を受けた。このことも後にドゴール派から責められることになる。

1940年12月31日、アメリカに渡ったサン・テグジュペリがそこに見たものは、アメリカに住むフランス人たちの党派に分かれての激しい争いであった。彼はフランス人の団結を何度も訴えたが、ファシスト、ナチ呼ばわりされた。ドゴール將軍は自分の指揮下で戦うように呼び掛けていたが、その戦いはドイツ軍のみならずドイツ軍指揮下のフランス軍とも戦わざるをえない戦いであったので、サン・テグジュペリは参加することを拒否した。

1942年に出版された『戦闘パイロット』の英語版は多くの人たちから賞賛されたが、そこには、休戦の正当化、ヴィシーの擁護、フランス軍の敗北が語られているとして、その書物を批判する人たちがいた。

サン・テグジュペリの団結の訴えは続いた。「あらゆる所にいるフランス人への公開状」を発表し、「フランス人よ、奉仕するために和解しよう」と訴えた。この訴えに対して、

87) *Ibid.*, p. 542.

ジャック・マリタンは、フランス人の団結を打ち砕いたのは、1940年6月に戦いを放棄し、フランス国民に休戦を強いた人たちであり、サン・テグジュペリはそのことを忘れていると断言し、休戦協定は止むを得ない選択であったことを認めるサン・テグジュペリを厳しく批判した。

1942年11月、今度は『戦闘パイロット』がフランスで出版される。アメリカにおける場合と同じように、この書物は多くの人たちによって賞賛されたが、厳しく批判する人たちもいた。P・A・クスターは特に、サン・テグジュペリが一人のユダヤ人イスラエルの英雄的行為を描いていることを問題とした。直ちに、この書物は発売禁止になった。彼は親ユダヤ主義者、反ドイツ主義者と見なされた。

サン・テグジュペリは自らの行動によって、批判に答えようとした。北アフリカに行き、戦闘部隊に加わり、ドイツ軍と戦うことを強く望んだ。兵役免除の理由は数多くあったが、彼は占領下で苦しんでいるフランス本国のフランス人に近づきたかった。彼らと同じように苦しみたいと思った。1943年4月、北アフリカに向かった。

北アフリカにおいても、ジロー派とドゴール派の対立は激しかった。アメリカにいたときドゴール派に加わらなかったサン・テグジュペリは、卑劣漢呼ばわりされた。

彼はウジダに基地を置く2/33飛行大隊に編入され、制限年齢をはるかに超えていたにもかかわらず、高性能のP 38 ライトニング機の操縦許可を獲得する。彼が望んだことは、フランス上空へ飛んで行き、苦しんでいるフランス人と一体となることであった。1943年8月、着陸の際に事故を起こし、そのために操縦が禁止される。

サン・テグジュペリの作品は北アフリカでは発売禁止となっており、一冊もそこには届かなかった。彼に対する中傷・侮辱は相変わらず続いていた。アメリカ派遣の軍事使節団の一員になることも、ドゴール将軍によって拒否された。

彼は、このような状況から脱出するために、再び飛びたいと思った。1944年3月、彼は多くの友人を通して働きかけた結果、飛行許可を得ることができた。喜びに満ちて、しかし死を覚悟して、フランス上空へ飛び立って行った。ドイツの戦闘機に襲われたり、酸素吸入器やエンジンの故障で何度も死ぬ思いをしたが、飛行中はとても幸せであった。友人たちは飛ぶことを止めるように彼に何度も忠告したが、彼は飛ぶことを止めなかった。1944年7月31日、アヌシー上空に向かって離陸したが、帰還しなかった。

なぜサン・テグジュペリは、高性能のライトニング機に乗り、死を覚悟して戦闘に参加したのか。ドゴール派などから浴びせられた非難に対して、命を賭けて行動することによって反駁しようとしたのであった。また、本国フランスから遠く離れて生活し、本国のフランス人の苦しみを理解できない者には、書く権利も語る権利もないことを教えようとしたのである。書き語り続けるために、飛ぶことによって彼はその権利を獲得しよう

としたのである。

ロベール・アロンの言葉が、彼の死の意味を明らかにしてくれる。「彼は、その子供たちが愛し合う味を失ってしまった国に対するあまりにも多くを要求する、あまりにも明晰な愛のために死んだのである。かれは、セクト主義と憎悪に対して抗議しながら死んで行ったのである」⁸⁸⁾

88) *Ibid.*, p. 542.